AJU コンビニハウス 会報

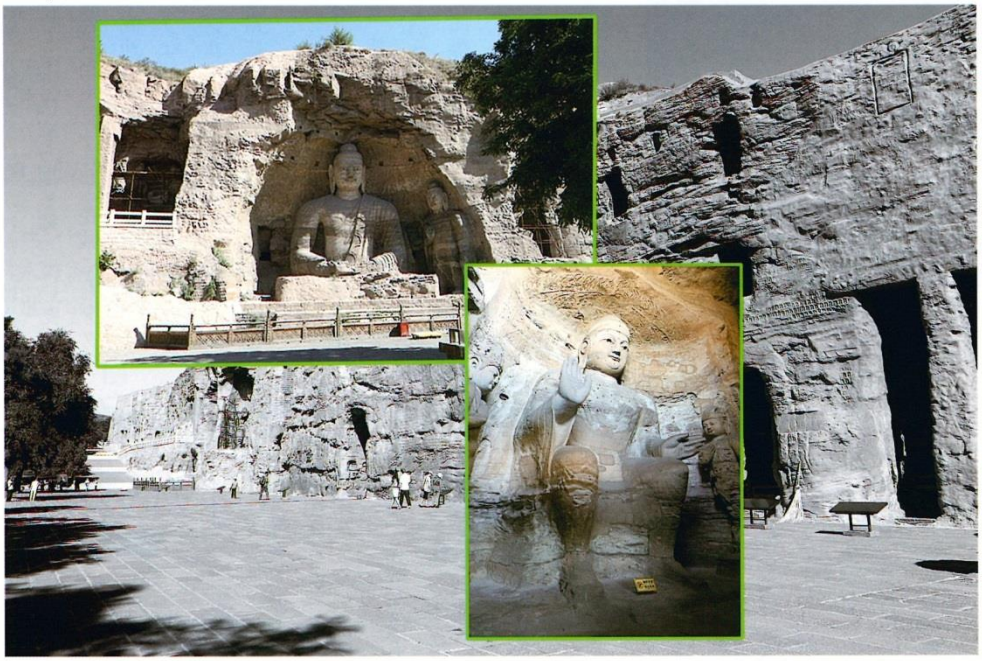
編　集/コンビニの会事務局
連絡先/〒452-0822 名古屋市西区中小田井 2-431
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人
コンビニの会

定価/150円
昭和54年8月1日第三種郵便物認可

第111号



山西省北部の街、大同にある仏教遺跡として名高い雲崗(うんこう)石窟・世界遺産

山西の旅

カメラマン　安藤　吉郎

昨年も行った中国・山西省に又来てしまった。日本から近いというのも一つの理由だが、亡父が青島と言っていたのが頭に残っていて、今回はあえて時間がかかるルートを選んだ。下関から青島へは週二便運航している船で二十八時間。窮屈な飛行機と違って動き回れるのがいい。船内は労働研修帰りの女子で混み合っていた。同室で日本にも留学経験ある大学の先生は飛行機恐怖症になって以来、この船をよく利用しているという。他にも西のシルクロード、北のモンゴル、ロシアを目指す一人旅の学生とお互いの旅を語りあった。

八月の青島は日本と同様、海への行楽客で賑わっているようで、宿探しや列車の切符を買うにも一苦労だ。行き当たりばったりの旅なので〝空き部屋ありますか?〟と探し回る毎日。外国人が利用出来ない宿も以外と多い。高速鉄道、バスを乗り継いで昨年訪れた娘子関に再び来る事ができた。駅のホームは行楽客であふれていた。

(次頁へ)

昨年長城への道すがり、家の前で暇そうに見かけたおばさんは、今年は旅遊案内を始めて忙しそうに立ち振る舞っていた。今回はここから少し離れた固関（グーグァン）長城にもタクシーで出かけてみた。長城は高速道を股いで南北に繋がっているが、整備修復されていそうなのは近辺だけだ。長城のろし台で近郊から来た大学生のグループと出会った。簡単な会話しか出来ないもどかしさは常にあるが、一緒に記念写真を撮り合った。

最近、ある新聞記事で「ダークツーリズム」という聞き慣れない言葉が目に留まった。一言で言えば、知らない世界で起こった戦争・災害・公害などの悲しみの記憶を巡る旅。ヨーロッパでナチスの蛮行を後世に繰り返させない為に発展した側面があるという。翻って私の山西の旅で亡父から聞けなかった戦争の記憶を少しでも共有出来ただろうか。父を悼むと同時に今の平和を噛みしめ、小さな出会いでも誠実に人間交流の旅が出来ればと思う。

固関長城で出会った学生達

雑記
ごまめの歯ぎしり

「はじめの一歩」

戦後最大の犠牲者を出してしまった火山災害。その御嶽山が噴火した時期と奇しくも同じ頃、我が家にも大変辛い出来事があった。知り合いの男性が山にきのこを採りに行ったまま行方不明となり、三日間の捜索の末、心肺停止の状態で発見されたのだった。

あまりにも突然の出来事で、ご家族の方も私自身もしばらく事実を受け入れることが出来なかった。特に、ご主人を亡くされたショックから「神隠しにあって今は戻れないだけです」とうつろげな表情で話をされる奥さんのYさんが心配で、葬儀の後も電話をしたりご自宅の方に足を運んだ。

私自身暗い気持ちから抜け出せないでいたちょうどそんな時、統合失調症で自立支援の施設に入所している兄が、宿泊の訓練のために十数年ぶりに帰って来た。一泊とはいえかなり緊張しているようだったが、ようやく第一歩を踏み出してくれた。

兄が施設に戻ったあと、Yさんの娘さんの家を訪れた。娘さんの手作りの料理の中にYさんの作った餃子も並び、久し振りに和やかな雰囲気で会話が弾んだ。Yさんが、「この間お父さんが見つかった所に行って来ました。すごい山でね。でも、倒れていた場所は休憩するのに良い所で日差しもさして」。ご主人の死を受け入れる覚悟が出来たようだった。「そういえば、Mさんの具合はどうですか。お見舞いに行きたいんです。それが私のはじめの一歩になるような気がして」。

はじめの一歩。どんなに辛い体験をした人でも、そこから踏み出すための力は必ず誰にでもある、そう信じたい。

（会報委員　上村　明美）

連載シリーズ

看取りの支援

（先回のお話）

64歳まで親戚のもとを転々としていた徳さんが太陽の里にやってきた。ボロボロの身なりに上履きすら持ってなく、園部さんが一緒に買いに行く。以降、徳さんは園部さんを「親方」と呼び、信頼関係を築いていった。

そんな中、徳さんに胃がんと診断が下る。すでに手の施しようの無い状態と医師から告げられ、園部さんは早期発見できなかったことを悔やむ。手術はしたが、抗がん剤と緩和ケアの併用で治療が進む。がんを治してあげたいと望む園部さんと、残りの時間は人生を振り返る時間にしてあげようという他の職員で、臨時会議が行なわれた。

人の生き死にに関わる内容にパート職員も含めた全職員が緊張した会議となった。

『TOMO　2012年5月号より転載』

待ってるからねぇ また明日・・・

太陽の里（埼玉県）
施設長　園部　泰由

2004年12月、一人の利用者が逝去されました。「徳さん」の愛称でみんなから慕われていた山崎徳次郎さん（仮名）です。

病気の発覚から亡くなるまでの4カ月間。ケース担当職員とともに、彼の最期によりそい続けた園部泰由さんが、その胸のうちを語りました

■自分の生きた道筋をたどる

幼い頃に生き別れになっていた実の兄の住所もなんとか探し当て、兄との再会を果たすこともできた。入所時に記載する指導台帳にも載っていなかったような情報を探し当てた栗原さんの執念は計り知れないものがあっただろうと思う。

実兄との話の中で初めて明らかになった徳次郎さんの人生。幼い頃に両親が他界し、自動車技師として勤めていた同僚の元に養子に出されたこと。養子に出された先ではとても良くしてもらえたこと。ともに満州に渡り、戦後引き揚げで日本に戻ってきたことなど。徳さんの知られざる人生。ぽっかりと空いた人生の空白が、実兄の言葉一つひとつで満たされてゆくのをわたしは感じた。

「徳さんに、自分の人生をふり返ってもらいたい」みんなの思いは同じだった。おそらく自分たちも自分の死を意識した際に、同じことを考えるだろうと思ったからだ。自分の死を意識したときに、最期に会っておきたい人は誰か。何を残していきたいと願うか…。徳さんの姿を重ね合わせながら、みんなが自分のことをふり返ったのだろうと思う。

■最後の一泊旅行

２００４年の秋に出かけた太陽の里の一泊旅行。徳さんにとっては人生最後となる一泊旅行であることを、職員も、本人も理解をしていた。行き先は時代劇が大好きな徳さんのために…と日光江戸村に。自分も夜勤明けの眠い目をこすりながら自家用車を走らせ、徳さんらと合流した。栗原さんとわたし、徳さんでおそろいのマグカップと、江戸村のマスコットキャラのにゃんまげの人形を買った。にゃんまげのシルエットの入ったそのマグカップは、今でも大事に使っている。

江戸村では徳さんがお侍さんの格好をして、大名行列も楽しんだ。こういう時も徳さんの周りには仲間たちがいるんだよね。それが楽しげで幸せな風景であればあるほど、わたしは切なくて仕方がなかった。

■『もういいよ、徳さん』

十二月に差し迫る頃から、徳さんの体調は悪化の一途をたどった。最期まで里に居たいと言っていた徳次郎さん自ら「入院をしたい」と申し出るほどだった。十一月末には3回の嘔吐。内部出血による貧血も繰り返し、相当辛い状況だっただろうと伺える。

十一月二十九日、病院に入院。入院後すぐにＭＳコンチンという、いわゆる麻薬…鎮痛剤が投与されるようになった。これを使い始めてから、病状の悪化は非常に早かった。この辺りから、「いつ何が起きてもおかしくはない」という状態になっていく。胃の中にできた腫瘍の腐敗が始まって、腐敗臭が呼吸に混じるようになる。食事も、栄養摂取というよりも楽しみとしてのアイ

スなどが主となった。

担当医と徳さんとは信頼関係もできていた。「最期は病院で」というのが先生の考え方で、徳さんも先生の言葉を信頼していた。「園部さんたちは自分の生活を支えてくれる人。病院の先生は病気を治してくれる人」だと徳さんは理解をしていたのだろう。入院以後は、先生が中心となって徳さんによりそい、わたしたちは徳さんの希望を先生を通じて伺うという形になっていった。

十二月二十日の夕方、徳さんの容体は急変した。数人も入れば一杯の、狭い集中治療室には、職員が十数人入れ替わり立ち替わり入ってきて、徳さんを囲んでいた。徳さんは息も絶え絶えに、取り囲むみんなを見つめながら、懸命に生きることを頑張っていた。

わたしはずっと病室の外に居た。中に入って徳さんの姿を見てしまったら感情を抑えきれなくなってしまうと思ったからだ。しかしいずれ自分の名前を呼ばれるその時が来る。わたしは副棟責任の職員に「もし徳さんが亡くなったら、ショックで俺、何もできなくなると思うから。その時は後を頼む」と、葬儀屋の名刺を渡した。…まもなく病室から、自分の名前を呼ぶ声がした。

「徳さん」しっかり面と向かってわたしは声をかける。その呼びかけに応えるかのように、徳さんはわたしの顔を見つめる。ハァハァと、まるで長距離マラソンをしているかのような息づかいで、見るに苦しそうだった。わたしは言葉を続ける「もういいよ。徳さん」と。そう呼び掛けるのは自分の役目なんだろうなと思った。

栗原さんにはその役目…重荷を背負わせるわけにはいかなかった。職員と利用者の関係を超えた、一人の友人として、その一言は自分が言うべきだと思った。「もういいよ、徳さん。もう十分頑張ったよ、な。徳さん…」徳さんは軽くうなずいた。その瞬間、徳さんの胸が大きく膨らんだ。徳さんが息をすることを…生きることを自分の意思で止めたのだということが分かった。

自分の耳には聞こえてこなかったが、最期のその瞬間、一言徳さんが「園部さん…」と言っていたんだよ、と、そのとき一緒に側にいた看護師が後日教えてくれた。

（次号につづく）

市江さんの入院生活を支えたもの

障害者サポートセンター舞夢
サービス提供責任者
渥美 道恵

前号で記事を書かれた市江さんの、ヘルパーをしている渥美です。

市江さんの入院生活を、ヘルパー集団「チーム市江」がどう支えたかというテーマで、経験したことを振り返って書かせていただきたいと思います。

■　■

これまでも、年に数回、入院することがあり、ヘルパーが付き添って介助をしていましたが、治療方法や方針の決定は、どんなに苦しい状態の中でも、市江さんが行っていました。私たちは、その度に原因や対応方法を学び、生活の中で予防できることは工夫し、次に同様の事が起こり始めたら、早く気づいて看護師や医師に伝えるよう、気をつけてきました。

しかし、今回は市江さんの意識がない為、お母さん(大川さん)とヘルパーが治療について決定することを求められ、また、重症であったため、経験のない場面ばかりが続きました。そのため、病院の医師や看護師の説明だけで、命に関わる可能性のある選択をすることができずに、迷ってばかりいました。

私たちは「市江さんの意識が戻るまで、何とか自分たちで」と思い、市江さんをよく知っている訪問看護師にアドバイスをもらいながら、お母さんと一緒に治療についての判断をしました。その後、訪問看護師に、医師と話す場に同席してもらうことにより、私たちもさらに安心して選択できるようになりました。

ただ、何が起こるかわからない状況での付き添いは、昼夜を問わず、高い緊張感の持続を強いられ、体力的・精神的な負担感は増していました。

退院の日の朝、喜びの笑顔が集まりました

そのため、二人で付き添う時間を増やす・付き添っているヘルパーへ、他のヘルパーから連絡を取って状況を聞くなど、ヘルパー同士で情報を共有し、フォローしあう体制が作られていきました。聞きあうことで、それぞれのヘルパーが、「自分は一人ではない」と感じることができ、大変な中でも市江さんに向き合い続けることができたのだと思います。

■　■

そして、市江さんから普段聞いていた言葉も「チーム市江」を支えていました。

「できることを、精一杯やってくれてればいいの。」

「今、入っているヘルパーは、皆、自分の命を託すことができる人だから。」

簡単に言えるはずのない、これらの言葉に込められた想い。その想いに応えるためにも、「いつものように、できることを精一杯やっていこう。」と思っていました。

そして、市江さんとの個別の関係だけでなく、支援をする人同士が、互いを信頼しあえる関係が作られていたからこそ、連携ができたのだと思います。

今年1月、市江さんとの旅行（左上、筆者）

■　■

今は、「あの時は大変だったけど、ここまで回復してきて、本当によかった！」と皆で笑って話しています。

しかし、すべてがうまくいった訳ではなく、事前に「急変した時、どう対応してほしいのか」を、しっかり聞いて、意見交換をしておくべきだった、という反省もあります。今後も継続して振り返り、話し合っていきたいと思います。

また、市江さんだけでなく、障害のある方が、少しでも安心して入院できる環境が整えられるために、何ができるかを考え、行動していきたいと思います。

本音を出し合う関係

エゼル福祉会　生活支援部

主任　麻生　早紀

職員の悩みとしてよく挙げられるのは「利用者との信頼関係を上手く作れない」ということだ。職員ごとに担当している利用者が違うので一概には言えないが、生活支援部では中堅職員となる5年目以上の職員が共通して抱えている悩みがある。それは「利用者に思っていることを話してほしいのに、本心を話してもらえない。」ということだ。

職員はその担当する利用者の愚痴を聞き続けたり、悩んでいることを一緒に考えたり、一緒に困った場面を過ごしたり、その利用者の事を一生懸命受け入れようと努力しているのだが、なかなか話してもらえないというのだ。

私も本心をなかなか出せない利用者Aさんを担当したことがある。AさんはOKのサインは比較的容易に出せるがNOのサインがほとんど出せなかった。担当し始めた頃のAさんは投げかけた言葉すべてにOKサインを返し、「ご飯はおいしかったですか？」にも「今日は楽しかったですか？」にも「昨日はよく眠れましたか？」にも手で○を作り笑顔を見せていた。

しかし、その笑顔はぎこちなく無理をしているのだろうというのは手に取るように分かった。

よって、Aさんは「嫌だ・怖い・緊張する」と言いたいだろうと分かれば、ゆっくりできる時間を多くとる、苦手そうな人や物から離す、安心できるように見通しの持てる過ごし方をする等して「私はAさんの敵ではない」と理解してもらえるように関わることで数年が過ぎていった。

数年が経ち、自立生活を支援し始めると関わる頻度が高くなり、嫌なことを避けながらAさんと関わっていくのは限界を迎え始めた。

数年の間に多少ではあるが信頼関係は生まれ、「疲れたね」「痛いよ」「びっくりしたよ」「間違えちゃった」等マイナスイメージのある感情もゼスチャーを使いながら介助者と一緒に振り返ることができるようになっていた。

それでも人に対するマイナスイメージを持つ言葉（緊張する・邪魔・嫌い・やめて等）は、こちらが問いかけても断固として否定していた。繰り返し、繰り返し「嫌な時は嫌って言っていいんだよ」、「困っていても言わなきゃ分からないよ」とAさんに伝え続け、言いやすいだろう雰囲気を作り、Aさんの言葉を待ち続けた。

しかし、どんなに待っても言葉は出てこず、代わりにこちらを見る目には涙が浮かんでいた。そのAさんの姿を見て、私は「こんなにAさんの事を思ってやっているのに、Aさんは応えてくれない」と打ちのめされると同時に、それまでの様々なストレスがあふれ出てAさんへの不信感・嫌悪感に変わってしまった。

そのことがあってからAさんに会う度に何とも言えないイライラが湧き上がってきてしまうようになっていた。

ちょうど同じ時期、私自身も上司から全く同じ言葉をかけられていた。それまで私は自分の気持ちを殺し、本音を出さないことで自分を保っていた。

自分の考えを言葉にするのは禁じられている、本音を出しても「良いこと」は起こらない、本音（わがまま）を言ってはいけないと幼いころから思い込んで本心を出さずにいるうちに自分が何を考えているのか、もっと言えば自分の喜怒哀楽さえ自分でも分からなくなっていた。

また、そんな自分は周りが期待するほど価値のある人間ではないと思っていた。自分の気持ちが自分でも分からないのに「言わなきゃわからない」と強要され続け、何とか絞り出した答えは「わかりません」という言葉と自分に対する情けなさ・やるせなさ・申し訳なさが混じったものだった。

頭の中がゴチャゴチャになっていく最中にふとAさんの姿が浮かんだ。「あれっ？今の私とAさんは同じじゃないか！」。

この気付きがあってから私にとってAさんは同じ悩みを抱える近い存在になったと思う。私とは違う形であってもAさんが苦しさを抱えながら頑張ってきただろう姿に愛おしさを感じるようになってきたのだ。

私の変化にAさんも気づいたのか「ごめんね。大変だったね。」という言葉にフーと息を吐きながら「そうだよー。」と優しく返してくれた。

蓋をしていた醜いマイナスの感情を紐解いて1つずつ言葉として表現する作業は慣れないうちは相当苦しい。

蓋が頑丈であればある程、一度きっかけを作ると堰を切ったように本当の自分の感情が溢れ出てくるため、それまで気付かないふりをしていた醜い感情が鮮明に浮かび上がり、醜く認めたくない自分とも否応なく向き合わなければならない。

その向き合う作業が苦しいのだ。苦しさは嫌な部分も含めて自分が価値のある大切な人間であると認められない自己肯定感の無さから生まれ、醜い感情を持つ自分も、出来ない自分も、劣っている自分も、頑張っている自分もすべて含めて大切な自分だと納得できなければ、逃げることはできても解き放たれることはない。

そして自己肯定感は、自分が認めたくない自分もちゃんと受け入れられていると実感できるような他者との深い関わりの中でしか生まれない。

現在、多くの職員は利用者が自己肯定感を持てるような深い関わりの支援で壁にぶつかり始めているのだと思う。おそらく深い関わりのためには職員も自分自身を問い直さなければならない場面に直面する。

それぞれ抱える苦しさは違うが利用者の心の揺れと共に職員自身の心の揺れにも向きあわなければならず労力を要する作業のため、職員にも支えとなる人が必要になる。

難しい課題に直面する職員の悩みを一人で抱えさせず、みんなでフォローし合えるような集団となれるよう組織としても成長し、よりよい支援に繋げていきたいと思う。

《 活動状況 》

9月

9日 相談支援従事者　研修　(有満)

12日 理学療法　研修

相談支援従事者　研修　(若林)

18日 エゼル福祉会　理事会・評議員会

あいされん暮らしの場交流会 (若林)

19日 理学療法　研修

アセッサー講習　(溝口・有満)

名古屋生活支援事業所連絡会

(大川・榊原)

22-23日 きょうされん全国大会　(小嶋)

25日 自立支援協議会施設部会　(若林)

WILL 親の会

28日 発達保障実践講座

(寺澤・溝口・増田・有満・

相模・久野・佐藤・浦丸)

10月

1日 会報会議

10日 理学療法　研修

自立支援協議会説明会　(若林)

17日 理学療法　研修

安居楽業ゼミナールささえる　研修

(馬渕)

ティンクル名古屋　説明会　(麻生)

地域一斉清掃活動

21日 NPO 会議

23日 WILL 親の会

23-24日 相談支援従事者　研修　(若林)

24日 あいされん運営委員会　(麻生)

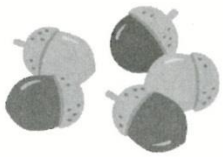
名古屋生活支援事業所連絡会

(大川・榊原)

28-29日 ジェントルティーチング研修(若林)

29日 新会計基準の学習会　(牧野)

サービス管理責任者研修 (寺澤・吉兼)



事務局コーナー

「ご協力ありがとうございました」

9月～10月（敬称略・順不同）

★　ご寄付いただいた方々

(NPO法人コンビニの会)
山上小枝子・冨永典子
蜂須賀知子・アイ
※会報購読料１万円以上お振込みの方を含む

(エゼル福祉会)
水谷和枝

★　物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)
水野香織・高田真由美
世古卓夫・桑原諸彰・西田直子

(ＷＩＬＬ)
若松泰弘・中谷暢宏・塩澤しのか
安永麻里・浅井宏紀・木下楓奈子
原あゆみ・小林良生・中部善意銀行
赤城町内会

★　活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)
伊奈晶子　石原正寅　青木政治　芝田真理子
辻本道子　桑原諸彰　黒田隆広　林　和子
高塚朱美　青木美乃　加藤　結　酒井まみ子
間瀬敬人　中谷友紀　山内良介　藤村亜子
葛山聖菜　山前諒汰　水野裕之　臼井裕香
河合尚武　小川阿弓　山崎直人　寺田みどり
水野裕哉　竹内恵子　藤井梨沙　稲垣ゆき奈
東原光江　田口陽介　山内麻衣　高橋なおえ
石原優花　伊藤沙樹　山口愛加　茂手木利典
神取優香　森島千絵　鍵谷美奈子

(ＷＩＬＬ)
森田　衛　須田たみ子
武部　文　堀江良子
梶田明宏　山崎和子

★　会報発送ボランティア
佐藤美紀子　吉田嘉子
高松陽子　大嶋千波

コンビニハウス　クリスマス会のお知らせ

皆様からのお申し込みをお待ちしています。

日　時　2014年12月13日（土）13時20分 開演
会　場　名古屋市 西区役所 講堂
名古屋市西区花の木二丁目18番１号
地下鉄　鶴舞線「浄心」駅 徒歩８分、「浅間町」駅 徒歩９分
定　員　80名　（定員になり次第、締め切ります）
参加費　600円（チケット代）
プログラム　名古屋バプテスト教会聖歌隊・WILLの仲間の出し物
バンド(Ｒｉｔｚ)演奏・大抽選会 他

介助が必要な方は介助者同伴(チケット必要)でご参加ください。
参加申し込みはコンビニハウスまでお願いします。
電話／ＦＡＸ　052-505-6082

息子は養護学校に入学したもののメソメソ泣いてばかりで、新しい環境に馴染むことができなかった。
図書室で借りた谷川俊太郎さんが自作の詩を朗読したカセットテープが慰めになって繰り返し聞いた。
重い障害のある息子に詩を愛でる感受性があることと同時に詩の持つ言葉の力に感動した。
今年も谷川さんのライブを企画してくれた水内喜久雄氏は長年にわたり名古屋で詩を広める活動をしている。
そんなご縁で今回の会報に相応しい詩を紹介していただいた。　　コンビニの会　理事　宮川　優子

地球船の航海

高丸　もと子

夕陽がビルの間に見える
沈むまでここにいてほしい

沈みおわるまで
大切な人と
手をつないでいましょう

そんな約束が
地球上にあれば

わたしうれしい
あなたもきっと
うれしい
乗組員いっぱいの
地球船だって
きっと
うれしい

絵：青木 静香

銀行口座
三菱東京 UFJ 銀行　小田井支店　店番 238　(普) 口座番号 1440108
特定非営利活動法人　コンビニの会
郵便振替口座　番号　００８００－２－３５１９０　　コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。
障害のある人たちの地域生活を支援する
特定非営利活動法人
コンビニの会
理事　宮川　優子
〒452-0822　名古屋市西区中小田井 2-431
コンビニハウス　Tel (052) 502-7731
Fax (052) 505-6082
URL　http://homepage2.nifty.com/convini/
E-mail　convini@beach.ocn.ne.jp

発行所：東海身体障害者団体定期刊行物協会　名古屋市中区丸の内 3-6-43　みこころセンター 4階